

---

# ツルッぱげ！

豊

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
ツルッぱげ！

【Nコード】  
N9839C

【作者名】  
豊

【あらすじ】  
本作品は打ちきりになりました。諸事情が重なり。

## No.1 ハゲはご子息様？（前書き）

若干、木浚塚とキャラが被るのは、リア友だからなのでその辺は頼みます

## No.1 ハゲはご子息様？

……朝、それは俺が最も嫌いとする時間。

俺の名前？

ほんたいたいや  
本多泰世

世って、や、と読めるのか？

話しは戻して、

理由は大きく分けて2つある。

1つ目は眠い。

2つ目はだるい。

ただそれだけ。

なんて簡単な理由なんだろう、といつも思う。

まあ、楽しみもある。

それは朝のバイキング。

食べ放題っていいねえ。

あ、別にホテル暮らしじゃねえぞ。

家が金持ちなだけだ。

簡潔に言つと、

先祖は本多つて言つ、徳川家の重臣で、有名なところを言つと本多忠勝かな。

まあそんな訳で、何代前かが事業を成功させて、今は年収30兆らしい。

俺には関係ねえけどな。

家を継ぐだけだしな。

まあ1つ言わせてもらつと、家継ぎたくないし。そんな俺なんだが、一応高校には通っている。

一番賢いらしいが、俺自身テスト受けて無いから分かん。

そろそろ、飯食いに行くかあ。

なつがい廊下を歩いていき、着いた先には和服のメイドさんたちが、きれいに一列に正座で並び、俺の到着に合わせて、きれいな礼をしてくれた。

「「おはようございます、ご子息様。」」

「いつもご苦労さん。母さんとかにやらされてるんでしょ？ 大変だね。」

文字数は多いが、気持ちはさほど込めていない。

めんどくさいしね。

今日はスパゲティが豊富だな。

その割りにはサラダが少なえじゃないか。

こりゃあ、料理長に注意しないとな。

などと考えている内に、俺は皿にサラダ5人前、ご飯7人前、味噌汁10人前を取った。

サラダはやっぱり水菜だな、と呟く。

「左様でございますか、でしたら、水菜の栽培も致しますか？」

「お、爺いいねえ。それ採用。」

爺、俺の良き理解者。

母さんや父さんよりも俺のコトを分かってくれる。

大切な人材だ。

「泰世様、お時間でございます。」

ん？ もうそんな時間？

至福のときは過ぎるのが早いねえ。

身支度を済まし、無駄にでかい門をくぐって、学校に向かった。

いや、反対方向に向かった。

ある奴を迎えに行くためだ。

おっと、また話がそれってしまったな。

学校はそんなに遠くない。むしろ近い。

徒歩10分ぐらいで着くから、近いんじゃない？

他愛もないコトを考えると、ある団地の前に着いた。

俺は大きく息を吸い込み、

「志流真あ！」

大声で叫んだ。

「い、今行く！」

どうやら俺の声で起きたらしい。

完璧に寝顔だったし。

女ならそついうとこ、見てみたい気がするな。

暇だから携帯をいじる。

最近は携帯小説にはまっていて、これが泣けるのよ。ホントに。

で、今も泣いているわけであつて、見られたく無いんだけども、まあ、溢れだして来るわけですよ。

人間って、めんどくさい生き物だな、とつくづく思うよ。

「うつす。」

「おはよ～～ふあ。」

え～とこいつらは、入上いりがみいさむ威装矛と、彼女の麦澤瑠羽那むぎさわるうはなつって、俺の幼なじみ。

仲睦まじきカップルである。

「わりい、遅くなった。」

やっと来たか。

時刻は……、アレさえしなかったら間に合うな。

志流真にだけやるかあ？



「何笑ってんだよ。」

おっと志流真につっこまれた。

どうやら、無意識の内に笑みがこぼれていたようだ。以後、気を付けないと。

さて、アレとは何か説明しよう。

簡潔に言つと、首筋を殴って失神させる。

ただそれだけ。

簡単だろ？

こいつはいじってて本気で楽しいからな。

いじる側としても、こいつはいじられる人材の中でも、まさに100年に一人級の逸材だよ。

まあ見ててみな……

「あ！ 志流真アレ！」

「えっ？ なん。」

ぼで！

ああ、顔面からチヨード派手に倒れたな。

それぐらいが丁度いいがな。

さて、こいつどうするかなあっと。

とりあえず、放置か？

「あゝ行くこつよゝ。」

「行くぞ。」

… 放置で決定らしいな。

いやあ助かるね。

俺が責められても、民主的に多数決で決まったのだからしかたあるまい。

と言えればいい話になる。

志流真をほって俺らは、いたって普通に、学校に着いた。

結構めんどくさいなあ、授業。

あーサボるかあゝ。

最近はやかいから、猫な俺でも割りと、過ごしやすくなってきたし。

屋上は……、寒いかな。

何だかんだ言って、この学校谷間にあるから風強いんだよな。

一時間目は、国語か。

大人しい池原恭子先生（29）だから、暖かい教室で寝るかな。

成績とかどうでもいいしな。

机に身を任せて30分。

俺は一睡も出来なかった。

というのも、池原の野郎、俺ばかり当てやがる。

「この歌は何句切れですか？　じゃあ本多君。」

また俺かい！

「3句切れです。」

「はい、そうですね。まあ分かって当然ですね。」

うわゝ嫌味かよ。

俺印象ぜってえ悪いわ。

その後も何かと当てられてやっぱり一睡も出来なかった。

とはいえ、昼休みまでずっと寝てたけどね。

購買まで歩くのめんどくさいし、昼は食べずに居ようかなあ。

なんて俺が考えていたら、最高の相棒が、やって来た。

「はい、泰世、カレーパン。」

「お、祐大サンキュー。」

あ、こいつは、俺の家のお手伝いさんの子どもの村中祐大。

親友と俺は思っている。

多分祐大も思っていると思う。

いや、思っただけで無かったら殺す。

カレーパンは70個あって、結構種類が豊富で、そこそこ美味しい。

「なあ、泰世。」

「はん？」

食ってる途中に話し掛けられると、少し困る。

「俺……、アイツのコトが好きで好きで、狂っちまいそうだ。」

ワックスで、ツンツンにしてある頭を両手で抱えて、うつむいた。

「河か？」

「ああ、河だ。」

やっぱりか。

「ん……？」

俺は何気無く見た先にみんなで仲良く食事をとっている、河こと、河中島千沙がいた。

河は明るく美人で、みんなに好かれている。

人望が厚くい奴だ。

話したこと無いけどね。

まあ祐大が惚れてしまうのはよく分かる。

しかし、ペチャにも程があるだろ。

「俺はペチャ好きだ。」

だよ。

人の好みだからつつこみはしないけど、やっぱりCは欲しいよな？

No.1 ハゲはご子息様？（後書き）

つまらないよね！ 書いててつまらないもん。先が思いやられます。  
。。（ノ、）。。。。感想、注意点とか待ってます

## No.2 ハゲピンチをチャンスに（前書き）

かなり短くしてみました。初めは800文字で止まっていたましたが、1000文字行つてよかったす

## No.2 ハゲピンチをチャンスに

つー訳で、前の続きを言うと、せめてCは欲しいって奴だけど、訂正、Dは欲しい。

欲望の塊だぜ、俺は。

さあて、本題に行きたいと思いまーす。

祐大は河こと河中島千沙が好きなわけで、俺は祐大を応援したいと思ってる。

そんな訳で、だ。

俺は今、女子の軍団の中央にいる河の目の前にいる訳で、なんつーか視線が痛い訳で、

簡単に言つと、こけた拍子に河のスカートをずらしてしまった訳で、

あ、

「訳で」が口癖になってるし。

そんなことより！

一刻も早く弁解しなければ……。

「その、あれだ。不慮の事故って奴だ。」

じーーーーー。



うわぁ、一人も信じてねえ！

これは流石の俺も堪えられねえ。

どうする？ 土下座か？

「もう、いいよ。」

不意に今まで黙っていた河が言った。

ここにいる女子はみんなで猛反発した。

そこまで、俺に何かしたいのか？

それとも、何かさせたいのか？

複雑な気持ち俺の頭を制圧する。

「ただし、条件があるわ。」

ゴクッ。

唾を飲む。

周りからはピリピリとした空気が漂う。

若干の間を取って……、

「私達と今度の日曜日デートしてもらいます。」

「「「ええ!?!?!」」」

女子に混じって、俺も言った。

罰と言うよりご褒美に近いんですけど……。

「メンバーは貴方の友達1人と、私の友人1人。」

ほう、ダブルデートですかい。

ま、相方は祐大で決まったな。

「1つ聞くぞ。」

「何?」

「もし、俺が醜い獣になったらどうするんだ?」

「貴方にそんなこと出来るの?」

ハイ。

出来ませんよ。

つか、河ってこんな性格だったわけ?

もっと大人しかったような……。

放課後

帰りは祐大と2人で帰っている。

まあ、話す内容は決まっているが。

「マジで？」

言った瞬間、祐大の瞳が煌めいた。

純粹なんだな。

いや、嬉しいよ。

純粹で。

腹黒い奴なんて嫌だし。

「とりあえず行けるんだな？」

「当たり前だ。」

よし、これ以後は日曜を待つだけだな。

くっくく。

楽しみだぜ。

翌日

祐大からの大至急のメールが届いた。

内容には驚かされた。

『泰世、聞いたか？ 相手は河と水瀬なんだって！ あと、威装矛のカップルも来るらしいぜ。』

という内容だった。

どこが驚くかって？

水瀬だよ。

水瀬ってのは、チョー美人で、チョー巨乳で、チョー成績良くて、チョー性格がいいんだ！

名前も水瀬<sup>まじか</sup>円なんだぜ？

まどかっていう響きがいいと思うんだよ！

こりゃあ、楽しくなりそうだ。

No. 2 ハゲピンチをチャンスに（後書き）

秋って寒いですね。ますます家に籠っちゃってますよ。・・・（ノ  
、）・・・。お陰で小説書けますがね

## No.3 ハゲデート（前書き）

いやあ、疲れたですよ。動物園ネタなんて、久しぶりだからですかね。

話が変わりますが、最近寒いですねえ。

もうすぐ、好きな人の誕生日なんですよ。因みに（、）ももうすぐなんですネ。

告ろうか迷ってんですよ。つい訳で、いつか、誕生日

ネタ考えてみます。

話反れまくってすんません。じ

ゃあ見てください。

## No.3 ハゲデート

運命の日の朝。

我が家では、パーティーするらしく、かなりの量の日本料理を作っている。

寿司、天ぷら、ソバやたこ焼きなどか大広間に並べられていて、どれも美味そうだ。

思わず、ヨダレが溢れ出てくるぜ、コンニャロー。

これなら俺もパーティー出たいし！

もちろん食べるだけだね。

が、今は急がねえとな。

祐大が待つてるから。

「泰世。間に合わんぞ。」

「わりいわりい。」

予想的中！

長い付き合いだと、心が読めるようになるんだな。

「爺！ 車頼む！」

「もう用意は出来ております。」

流石は爺だ。

まさに意志疎通だな。

デート会場は近くに新しく建てられた、動物園だ。

そこそこ人気があるらしいが、行ったことがない。

確かデート用に作られているらしいが……。

「着きました。ご子息様。」

つー訳で到着。

結構広いな。

思っていたよりも何倍もいい感じだ。

入場ゲートの前まで行くと、きれいに着飾った2人が立っていた。

2人共に可愛い。

特に水瀬の白のワンピースってのが、清楚な感じが出ていて可愛い。



隣の河も黒で統一されていて、大人の感じが出ていて美しい。

いやあ、マジでござ褒美みたいだね。

「待ったか？」

「うつん別にだよ。」

と、満面の笑顔で水瀬は言った。

一瞬、ムラムラしたんだが、俺だけだろうか？

いや、一度見てみる。

絶対にムラムラくるぞ。

それは置いといて、俺たちは最初にペンギンを見に行った。

可愛いペンギン達がペタペタ歩いていて、マジで和むわあ。

「可愛いね。」

「だね！」

全く分かりやすい奴だ。

声が裏返ってるよ。

「本多君は動物好き？」

「え？ あ、まあそれなりに好きかな。水瀬は？」

あまりの不意打ちに、声が少し変だった。

つてか、悩殺スマイルなんですけど。

「私は大好き。だって可愛いんだもん。それと、円でいいよ。」

ぐはっ！

またも悩殺スマイル！

これ以上されると、制御出来なくなつて暴れだしそうだ。

なんて考えているうちに、河と祐大のペアはかなり先に進んでる。

「置いてかれたね。」

「だな。」

さて、追いつくべきか否か、どっちだ？

「……………」。

「……………」。

長く重い沈黙。

これは最悪だな。

何か話題を……。

「あの、」

「あの、」

「あ、はい？」

「何？」

うは！

同じタイミングって、かなりベタなんですけど。

こんなことあるんだな。

マンガとかドラマとか小説だけと、思ってたよ。

あまりいい雰囲気とは言えない。

この苦境をどう乗り越えようか。

やっぱ、何見るかとかで乗りきるしか無いな。

「ライオン、見に行かない？」

「はい。」

うし。

作戦成功。

だが、精神的ダメージが危険値まで上がっている。

マジでヤバいわ。

着くとライオンたちは、お昼寝、いや朝寝をしていて、ピクリともしない。

なんつーか、チョータイミング悪いんですけど。

「どこ行く？」

「蛇がいいです！」

蛇か、爬虫類が好きなのかな？

ライオンから蛇がいる、蛇の館は割と近くにあって、楽に行けた。

中には各種類の蛇ごとに、仕切りがあり、ソファァーが1つ、クッションが2つあった。

デート用とはこういうコトなのか。

なかなかやるなあ、これは流行りそうだ。

うーん、それにしてもどこも空いてないな。

これじゃあ、見れないじゃないか。

折角来たのに……。

「本多君！　ここ、空いたよ！」

「お、おう！」

どうやら、入り口に近いところが空いたらしい。

笑顔の円が大きく手を振って、こっちこっちと催促していた。

このシーンを永久保存番の写真に撮っておきたい。

なんつってな。

そこまでは要らないな。

「この蛇大きいねえ。」

「だな。」

見た感じ、6メートルはある、かなりでかい蛇が、一匹いた。

でも、その蛇、大きく口開けて、牙でガラスに穴開けてるんですけ

ど。

やばくないっすか？

いや、ヤバイよね。

絶対にヤバイよね！

「チクチクして気持ちいい！」

円メツチャ笑顔で、貫通した牙を触ってるんだけど、危ないよね。

パキッ！

ひび割れした…………。

「円！ 逃げっぞ！」

「アハハハ。」

完全に自分の世界入ってるし。

「行くぞ！」

無理矢理、円の手を引いて、蛇の館を出た。

俺たちが出た後、蛇の館から悲痛な悲鳴が、聞こえて来た。

御愁傷様です。

さて、心を切り替えて、次のところ行こうか。

「蝙蝠がいいな。」

んー、円って、可愛いけど、何かがずれてるよな。

気のせいだろうか？

蝙蝠の部屋は、限り無く大きく、とてつもなく蝙蝠の数が多かった。

蝙蝠の部屋は、かなり暗くて、全種類の蝙蝠を、同じ部屋に飼っていた。

中には花を食べている蝙蝠や、餌用の蛾を食べている蝙蝠もいた。

「近くで見ると目が大きくて、可愛いね。」

うん。

確かによく見ると、目が大きく、可愛い。

イメージとは大違いだ。

もつと変な顔してると思っていた。

鼻も豚みたいで可愛い。

ゴン！

ゴン！

突如、ガラスに体当たりしだした。

ちょっと待て。

中で何が起きてんだ。

「痛そう……。」

「だな。」

ミシ！

今、とうとうガラスにヒビが入った。

さらに蝙蝠は、勢いを増していく。

うーん、今日はストライキが多いな。

「円、逃げるぞ。」

「う　、あ。」

時既に遅し。

ガラスは派手に割れて、無数の蝙蝠が一気に雪崩れ込んできた。

蝙蝠の部屋に居た、カップルたちはギャー、ギャー叫び、逃げ惑った。



「円！」

「本多君！」

俺たちは離れ離れになり、蝙蝠の群れに襲われた。

「はあ、はあ、はあ。円……。」

気が付けば、俺は外に出ていた。

空には無数の蝙蝠で覆われていて、空が黒くなっていた。

多分野生の蝙蝠も合流したんだろう。

動物園上空全域が真っ黒だ。やっかいなコトになったな。

とりあえず、円を探さなきゃ。

俺は逃げる人を避けて進み、蝙蝠の部屋の周りを探し回った。

何周ぐらいしただろうか、疲れはてた俺は、ベンチを見つけ、座った。

「泰世あ！ どうしたんだよこんなところで。」

「どーしたのー？」

隣からとても聞き慣れた2人の声がした。

「威装矛に瑠羽那あ。」

そこには、威装矛と瑠羽那が手を組んで、ラブラブな雰囲気を出している。

「居たんだ。」

「うわ！ ひでえ！」

「ひどくいい。」

なんつーか、やりにくいな、こいつら。

「怒んなって。ところで円見なかったか？」

「水瀬が見てないよな？」

「うーん。見てないよー。」

ちっ！

どこ行ったんだよ。

「分かった。それじゃあ、デートしてくれ。」

再び、探しに出た。

後ろで威装矛と瑠羽那が、何か言ってたから、一応手を振った。

相変わらず混乱が続いている。

上空の蝙蝠はどんどん勢力を増やしている。

どうしたモノか。

しかも、数100匹は人を襲っていて、大勢の人が怪我をしている。

「本多君——！」

真左から円の叫び声がした。

声がした方へと全力疾走した。

そこには何10匹の蝙蝠に囲まれて、

楽しそうにしている円がいた。

絶句だ。

「まど……か？」

「あ、本多君！」

そう言つて、蝙蝠を引き連れて、こつちに来た。

何て言えば、良いんだろう？

「この子達ね野生から無理矢理、連れて来られたんだって。」

ハイ？

意味がわからないんですが……。

キョトンとしている俺を見て、円は楽し気に、

「私ね、昔から動物と話が出るんだ。不思議だよね。」

と言つて笑つた。

かなり深刻なコトじゃないか！？

もっと早く言つて欲しかったよ。

## No.3 ハゲデート（後書き）

動物園ネタが終わったらキャラクターの紹介をしたいと思います。

No. 4 ハゲハゲハゲ（前書き）

短めですね、イ、

## No.4 ハゲハゲハゲ

「とりあえず、蝙蝠を落ち着かせる。」

「無理だよ。だって、言うこと聞くのこの子達だけだもん。それに……。」

少し暗い表情をした。

そっぴや、こんな顔初めて見るな。

「可哀想だよ。」

予想外の返事だった。

また絶句した。

そこまで考えていたなんて思ってもいなかった。

「優しいんだな。」

「だって、元々は野生なんだし、野生動物は野生に居なきゃダメなんだよ。」

変に説得力があり、俺は心を打たれた。

感心、というよりは尊敬に近い気持ちが芽生えた。

「他の動物たちもそうなんだって。」

……………なんてコトをするんだ。

この管理人は、鬼なのか？

「じゃあ、そいつらに他の蝙蝠に逃げろ、って伝えてくれ無いか？」

「うん！」

円にいつもの明るい笑顔が戻った。

「  
」

聞いたことの無い言葉を口にする円。

すると蝙蝠たちが、空高く飛び上がって行った。

徐々にだが、蝙蝠が逃げ始めた。

バン！

突如の銃声、少数武装した大人。

空から真っ逆さまに落ちてくる蝙蝠。

子どもの泣き叫ぶ声。

その場は騒然となった。



「　　テメエ！」

無意識の内に大人に殴りかかっていた。

「止めなさい！」

他の大人が止めにかかるが、そんなの関係ない。

俺は手を押さえられても、臍を掴まれても、殴り続けた。

俺は突き飛ばされた。

携帯を取り出して爺に連絡を取った。

「爺、H・O・T・A・を出せ。」

「分かりました。」

爺の対応はいつも通り早かった。

連絡を取って5分、黒服の頭がツルツルなおっさんたちが、爺を先頭に武装して、やって来た。

このおっさんたちが

H・O・T・A・

正式名は

ハゲたオッサンたちの集まり

俺が作った本多家の特殊部隊だ。

「アイツらを殲滅せよ。」

無数の銃声が響き渡る。

……………もちろん麻醉銃だ。

人殺しだけは絶対嫌だからな。

大人たちはぶっ倒れた。

「蝙蝠はどう致しましょうか？」

煙が上がっている銃口をかつこよく吹いて言った。

逃がせばいい。

「そうですね。」

爺は笑顔になった。

そうそう、爺は動物が大好きだったんだ。

優しいようなハゲ。

それが爺の容姿だ。

蝙蝠たちが逃げ、平和を取り戻した動物園の午後。

俺たちは威装矛・瑠羽那と合流した。

「大変だったねえ。」

「だあゝふへえゝ。」

「瑠羽那あ、欠伸も可愛いぞっ！」

……、見事な世界の作り方だ。

見習いたいものだな。

それはまあいいとして、デートは順調に進んでいた。

## No.4 ハゲハゲハゲ（後書き）

マジで寒いですねえ（本日2回目）。学校で凍えながらコクの曲聞きてます。後書きメンドーなんで終わります。

No. 5 ハゲ、食って、くしゃみ（前書き）

いやあ、塾や宿題で更新が出来なかったんですね。塾は女子ばかりで、ハーレムなのか違うのか……それが更新出来なかった言い訳です（笑）

## No.5 ハゲ、食って、くしゃみ

そう、順調だった。

あれから5時間後、俺たちは夜の街をブラついていた。

まだまだ夜は肌寒い春先、温かいものでも食べようと話した結果、カニ料理を食べることに。

「一番高い鍋20人前とカニの刺身30人前。ドリンクは酒以外全部定期的に持つてきて。」

あまりの注文の多さに驚き戸惑う店員さん。

そして、カニだ、カニだ。と踊る威装矛と瑠羽那と円と裕大。

個室で良かった。

しばらくして、何人も店員さんが来て、カニを大量に持つてきた。

ますますこの場が盛り上がる。

マジで恥ずかしいんだけど……………。

「さあ！ 食うぞー！！」

そう雄叫びを上げて、威装矛が一気に刺身にかぶりつく。

負けじと裕大も何本もかぶりつく。

結局はみんなかぶりついて、鍋のお世話を誰もする気は無いらしい。

おい、鍋は誰がするんだ〜？

「鍋ふあ〜。泰世おへえふあい。」

食べながら欠伸をしてしゃべる。

どれか1つにしろ！

「ふあつてえ〜。」

……………はあ、俺がやるかあ。

腹減ってるのに。

カニを軽く沸騰したお湯にくぐらせて、少し白くなったらあげる。

それをこいつらが遠慮なくたいらげる。

その繰り返し開始20分、俺はまだ1本も食っていない。

つたく、俺もお人好しだよな。

「本多君も食べれば？」

俺がカニをしゃぶしゃぶしていると、隣から円がカニを持って来て

言った。

ああ、根が優しい女は優しいんだな。

あつちの女とは違って。

「ふあい、威装矛アーン。美味しい？」

「はむ。超うまい。お返し。アーン。美味しいか？」

「美味ふい〜」。

.....。

さて、裕大はどうか？

「うめえ！ 河のしゃぶしゃぶしたカニうめえ！」

「ほんと！？」

.....。

ああ〜、裕大たちはいつの間にかラブラブだし、威装矛たちも超ラブラブだし、なんつーか俺ら場違いみたいだな。

「は、ハイ、本多君。」

「あ、サンクス。うんうまい！」

それでも無さそうだ！



カニってこんなに美味かったんだ。

え？ 円の効果？

そうかもなあ。

1時間後、俺がしっかりと全て食べて、代金を払って店を出た。

「瑠羽那、帰ろうか。」

「ふあん。」

「河、帰ろ！」

「うん！」

ダブルペアは手を繋ぎ、仲良く帰っていった。

かなり羨ましいんですけど……！

あー2人きりだな。

送ろうか？

「え？ あ、うん。ありがとう。」

この笑顔に惚れてしまったかもしれない。

それはさておき、俺ら2人は円の家に向かった。

会話など無い。

ただ静かに歩くだけ。

「雨……。」

いきなりの雨だった。

次第に雨足は強くなり、仕方なく雨宿りすることに止むかな？

「やんで欲しいね。」

可愛らしく首を傾けていった。

つてか、止まないとパーティー中の爺を呼ぶことになるから、是が非でも止んで欲しい。

ザー……。

俺の願望はあっけなく、打ち碎かれた。

という訳で1時間過ぎた訳なんだが、雨足は強くなる一方で、止む気配が寸分も無い。

もう爺を呼ぶか？

半分諦めかけた時、少しだけ雨足が弱くなった。

行くぞ！

「うん！」

満面の笑みだった。

俺は円の手を引いて走った。

結構速めに。

「あつ　。」

「……ありがとう。」

こけかけていた。

タッチの差（？）で円の手を掴み、抱き寄せた。

あー、これはワイセツ行為に当たるのかな？

「……ううん、普通の行為だよ。」

本当に円は優しい。

普通、悲鳴をあげないか？俺が女ならあげるな。

間違いなく。

まあそれは良いとしてだな、俺たちがもう少しで円の家に着くって時に、急に雨足が強くなった。

俺は上着を脱いでソツと円に差し出した。

「う、ごめんなさい。」

ちよこつと頭を下げた。

良いつて。

気にするなよ。

これが男の役目なんだからな。

そんなこんなで円の家につくときにはびしょ濡れになっていた。

薄着だった円はブラやらパンティやらが、透けちゃってるから、目のやり場に困った。

と言っても、そういう物に目が行ってしまうのは、男の性って奴だな。

「今日はありがとう。またね。」

家の中に消えていく背中をずっと見守った。

翌日

はっ

はっ

ハックショーーン！！

飛び出た鼻水をティッシュで拭く。

完璧に風邪ひいたな、こりゃあ。

No.5 ハゲ、食って、くしゃみ（後書き）

リアルに風邪ひきました。（涙）鼻水が止まらないんですよ。（泣）  
奇遇にも見てくださった人も見なかった人も風邪には気を付けま  
しょうね。（泣）

## No.6 夏の文化祭前のハゲ（前書き）

関係ないですが、リアの桃内士郎（？）氏がリレー小説を書くらしいです。詳細は上記の先生の作品を見てください。

## No.6 夏の文化祭前のハゲ

そろそろこの学校のコトでも紹介するかな。

みやびだんはなみ  
県立雅山間高等学校

県内トップの学力を誇っている。

生徒総数は約1000人

野球部は甲子園大会常連校で全国制覇もしたこともある。

学校行事は四季の文化祭、修学旅行、クリスマスパーティー、卒業旅行等々。

俺は帰宅部だ。

つーか、威装矛以外俺の周りの奴みんな帰宅部なんだけどな。

さて、どうしてこんなことを言っているかと言うと、だな。

あと1週間で夏の文化祭があるんだ。

その前置きみたいなのをしてたって訳。

さあてと、そろそろ会議だな。

12分に寝たから起きるかな。



## 教室

教卓に双子の姉、学級委員長の杉里眞那と双子の妹、副委員長の杉里実沙綺がきれいに並んでいる。

「はあい、という訳で模擬店は執事喫茶に決まりましたあ。拍手」

パチパチ……

拍手をしたのは女子の中の数名だけだ。

ちょっと待て。

まだ多数決すらしてないぞ。

その前にまだ会議始まって1分と経っていないぞ。

「気にしないで。眞那姉のコトでしょ？」

あ、そうだなあ、眞那姉のコトだもんなあ……って、おい！

危うく流してしまうところじゃないか！

ヤバイ、ヤバイ。

いつもの調子で行かれると確実に執事喫茶になっちまう。

なんとしても阻止しねえと……。

「しつもん。」

お、志流真が手を挙げた。

がんばれ〜。

「メイド喫。」

「死んでください。」

「志流真あ、1回地獄行く？」

……瞬殺かよ！

もっとながんばれよな！

しかし、相変わらずあの双子は強いな。

悔しいけど、阻止は無理だな。

「はあい、泰世と裕大と志流真執事けつてえ〜。」

……強制かい！

「真那姉なので。」

そうだな、眞那姉だからな、仕方無いか。

もはや対応が面倒くさい。」

「はあい、女の子は料理係ねえ。あと材料調達も女の子ねえ。」

んーかなり進行が早いな。

さあて、俺は執事らしいが具体的に何をすればいいのかな？

「女性客に快樂と癒しを与えなさい。」

え……………？

快樂与えていいの？

「一種の比喻と思って下さい。」

ああ、比喻かあ。

納得納得……………するかボケ！

てかその前に担任は何をしてるんだよ！？

「中山センセ？ ああほらソコで生徒の成長を見てるじゃん！」

「呼んだ？」

そこには椅子に座って、眠たそうに……………いや、寝起きの顔で見ていた。

確実に寝てたな。

担任がこんなだから双子が実権を握っちゃうんだよな。

「何か言いましたか？」

笑顔で言う。

……笑顔が怖いなんて初めての経験何ですが……。

「センサーあとは後日で良い!？」

「……え？ あ、はい。」

完璧に寝ていた中山先生は少し驚いた顔をした。

「はあい、かいさあん!」

真那の声と共に一斉に教室を駆け抜ける人影が1つ。

……中山先生である。

何でか知らねえがいつも誰よりも早く教室を出る。

戸締まりが嫌なのか？

そんな子どもみたいな理由な訳無いか。

「いえ、そうらしいですよ。何でも1人が嫌みたいですね。」

……そうなのか。

意外と子どもなんだな。

「さっさと帰って下さい。帰る時間が遅くなりますので。」

はいはい。

分かりましたよ。

それじゃあ皆さんまた次話で会いましょう！

……我ながら変な終わりがただ。

## No.6 夏の文化祭前のハゲ（後書き）

寒いですね。朝死にそうですね。なんだか毎回寒いって言ってるよ  
うな……。インフルエンザシーズン、受験前だからひかないように、  
ガンバラナイト。

## NO.7 ハゲしい文化祭 前編（前書き）

イベント大好き、豊です。という訳で、三話ぐらいに分けて文化祭を。

## No.7 ハゲしい文化祭 前編

.....

夏の文化祭当日になった訳なんだが、男子はあの後全員執事やられることになった。

反対する奴もいたが、志流真みたいに瞬く間に、駆逐されていた。

で、今はクラス全員で模擬店となる教室で円陣を組んでいる。

「一番儲けてえ、明日の夜に飲み会やるうぞぉ！」

「真那姉に従えば、楽勝ですから逆らわない様にしてくださいね。」

「「「「「おーーー！！」「」「」」」」

という感じに盛り上がり、女子はキッチンとなる所へ。

男子は控え室で待機して開場を待った。

「例年通り客は多いみたいですから、儲けて下さいね。」

などと実沙綺が各執事にいい回っている。

いやあ、緊張とかじゃなく、羞恥心がかなりあって、嫌なんすけど。

左隣の志流真は足震えてるし、右隣の裕大は仲良く河と談笑してるし、なんだか嫌だな。



普段執事を雇っているからかな？

そんな俺を無視して、開場時間は刻一刻とせまっている。

そして、

「さあ、開場1分前だよ。入り口前に並んでえ。」  
続々と執事たちは入り口前に並んでいく。

一応俺も並んだ。

とうとう、この時が来た。

「お帰りなさいませ。お嬢様。」

一斉に頭を下げる。

客さんは予想以上にいた。

それも美人ばかり……。

「お嬢様、こちらへ。」

基本、客は1人1組で1つのテーブルに案内する。

そう基本は、だ。

「はあ！？ 何で俺らが離れ離れにならないとダメなんだよ！？  
おかしいだろ！？」

怒りで椅子を蹴飛ばす威装矛。

それを何故か、若干頬を赤らめて、欠伸をして見つめる瑠羽那。

ああ！ もうやってらんねえ！

なんでこんなコトになるんだよ！

てか、威装矛は怒りすぎだろ！

営業妨害だろこれは！

「お止めくださいご子息様！」

あーらら、かなり困ってるな。

ここは俺の出番だな。

「威装矛様、椅子を用意させて頂きますので、どうかお静かに御願  
いします。」

な、な、な、志流真あ！？

あいつ、爺みたいな髭はやして、髪の毛も白くして、どうしたんだ  
！？

しかもやけに落ち着いてるし！

「し、仕方無いな。志流真に免じて許してやるよ。」

落ち着きを取り戻す威装矛。

すげえ迫力だったあ。

その前に志流真すげえ。

マジで驚いた。

今度、執事として、雇おうかな。

などと、俺が考えているうちに店内にはかなりの客が入っていた。

「志流真さあん、3番席指名入りました。」

焦りながら志流真が駆けていく。

「志流真さあん5番席指名入りました。」

また駆けていく。

「志流真さあん7番席指名入りました。」

すげえ人気じゃないか！？こいつあかなり金儲け出来るな。

っーか、かなり暇なんすけど……。

いや、その前に爺みたいな志流真が何故あんなに指名が入るんだ！？

「裕大さあん8番席指名入りました。」

裕大がゆつくりと歩いていく。

「裕大さあん12番席指名入りました。」

……いやあ、繁盛するっていいねえ。（泣）

悲しくなった俺は裏に回り込み、指名表を見た。

指名数トップ志流真35、2位裕大27、3位伊志田光成20、俺、0。

……どうしようか。

誰か俺を指名してくれ。

そんな俺を横目に忙しそうに働く志流真たち。

……ちょっと羨ましい。

誰でもいいから客を分けてくれえ。

「泰世あ！？ 暇そおねえ。ちゃんと働きなさいよ！」

働きたくても指名が無いけりやあ働けねえだろ！

「なんか文句あるの！？」

……はい、すいませんでした。

で、何をすればいいんだ？ 皿洗いかな？

「泰世さあん、1番席指名入りました。」

「だつてえ。」

そう言つて眞那は後ろから突いてきた。

誰かは知らないけど指名ありがとー！

「お待たせしました、お嬢さ　　円あ！？　どうしてここにい！？」

1番席にはニコニコと悩殺スマイルを振り撒く円が座っていた。

「あ、いや、千里が来たいって言ったから着いてきたら、本多君の名前があつたから……。」

俺に会いに来たんじゃなくて指名ありがとー！

けがの功名つて奴？

「それはちよつと違うと思う……。」

まあそれはいいとして、何か食べる？

「じゃ　　」

「泰世あ！　お嬢様に対してその態度は何！？　身分をわきまえないー！」

「眞那姉は地獄耳だから何でも聞こえるので、無闇に変なこと言つ

と、地獄に落ちますよ。」

こゝろえ。

ってか、いつの間に居たんだよここに！

「じいー」。」

……

真那の殺気がおおいに感じられたので、仕事でもしよう。

お、お嬢様、何か食べますか？

「じゃあ、カレーライスとコーヒーマグで。」

かしこまりました。

……なんか変だよな。

爺たちはいつもこんな思いをしているのか？

それならちょっと気を使わないとな。

「お待たせしました、お嬢様。」

出来上がったカレーライスとコーヒーマグ、マグを置いた。

円はカレーライスを見つめて、1口。

……

「おいしい！」

おお！

俺が作った訳じゃ無いけど、なんだか嬉しい。

じいー、とカレーライスを小さな口で食べる円を見つめてしまふ。

「何かついてますか？」

あ、いいや。

何もついてないよ。

……これじゃあ純愛小説になっちまう。

なんとしても止めなければ……。

「泰世さあん、2番席指名入りました。」

うおっ！？

いきなりだな。

では、お嬢様失礼ですが行ってきます。

「行つてらっしゃい。」

笑顔で送ってくれる円。

こついうのもいいな。

「泰世さあん、9番席指名入りました。」

「泰世さあん、3番席指名入りました。」

次はあつちか！

「泰世さあん、6番席指名入りました。」

今度はあつちか！

### 昼休憩

はあ、はあ、はあ、はあ、疲れたあ。

ありえねえ、1時間で40以上指名なんて、ありえねえ。

「みんなあ、いいねえ、早くも黒字だよお！ まあ欲張らずに午後  
はランキング上位5名は抜けていいからねえ。」

「お昼ご飯は他店で適当に食べて来てください。くれぐれも店の物



を食べないように。」

やったあ！ 自由だあ！ ギリギリ5名枠に入れたあ！ 神様、  
様、お嬢様、ありがとー！！ 仏

No. 7 ハゲしい文化祭 前編（後書き）

寒いですねえ。布団から出たくないですよ。風邪気味だし……

No. 8 ハゲしい悲劇（前書き）

若干エグい表現があります

## No.8 ハゲしい悲劇

あー、そのなんだ、さっきは調子ぶっこいて、す、す、す、す  
いまで……すいませんでした！

……うわぁ！

「ちゃんと謝りなさい！」

教室から逃げたそうとする俺を眞那が、なんかカウボーイが使う縄  
で首に引っかけ、思いっきり引っ張って止めた。

もちろん俺は咳き込みながら後頭部から倒れた。

チキショー、なんて強さだよ。

「泰世あ、もう一回されたいい??」

丁寧に断り申し上げます、はい。

「あらあ、そお。」

不敵な笑みを浮かべて絞めている縄を強める眞那。

なんで強める!?

「2人きりだねえ……。」

キャラ設定が違 う！

ツンデレキャラじゃない！

眞那はツンツンキャラのはずがぁ！

「これなら誰が来ても問題ないねえ……。」

と言って、頬を紅く染める眞那。

これじゃあ調子が狂っちゃまう！

「たとえば、ここで私が殺しても……ね。ウフフ。」

何いー！

待てえ、早まるなあ！

「貴方に死んで貰えればこちらは楽に本多家を潰せるですよ。」

実沙綺までえ！？

実沙綺は両手にナイフを素早く繰り出して、掌で回しながら近づいて来る。

それを冷たく見つめる眞那がゆっくり機関小銃をスカートの中から取り出す。

この2人こええ！

ってか死ぬなこりゃあ。

ここで、死んだら、悲しいぞ俺。

「刺殺か銃殺、どちらがお好みですか？」

そうだな……刺殺かな？

「いやだよ。銃殺けてえい！」

そうかあ、銃殺かあ……って意見の意味が無いだろうが！

それなら初めから聞くなよな！

「へえ、そんなこと言って良いんだあ。」

威圧感がたつぷりとある瞳とオーラで笑う真那。

再びこええ！

ダメだ。

もう諦めるしか無いな。

親父、爺、お袋、イギリス留学中のまだ登場してない姉貴、そして  
皆、こんなところで死んでしまいそうだ。

本当に悪いな。

「じゃあバイバイ。」

バン！

キーン！

不思議だな、痛くない。

即死なんだな。

「気が早いよ。本多。」

はい？ どなたですか？

死神さんですか？

「ばあか、伊志田だよ。」

「ちっ！」

いやあ、目の前で何が起きてるか分からないんですかあ……。

「目を開ける。」

え？ 目を開ける？

死んだはずじゃ……？

状況を把握出来ないまま目を開けてみる。

そこには立派な日本刀を両手に持った美青年の伊志田光成が立っていた。

「銃刀法違反で現行犯逮捕する。」

「貴方も銃刀法違反じゃない？」

「俺は日本政府裏警察少年課長って知らないか。」

すごい人材がこんなところにいた！

しかもチョークールだし、かなりのイケメンだし、甘い声だし、いいところしか無い。

こういう人間もいるもんだな。

新鮮な驚きだ。

さて、どうしたものか。

このまま伊志田光成に任せればいいのか？

それとも、

「とりあえず机で簡易な防壁を作ってください。」

わかった。

じゃあ後は任せた。

「か、完敗です……。」

ドスッ、と伊志田光成が倒れる。



床には伊志田光成が流したのである。真っ赤な血が広がっていく。

……倒されるの早！

本当に課長さん！？

「じゃあ、貴方も死にましょうねえ。」

機関小銃を軽々と片手で構える。

カチャ。

死へのカウントダウンが始まった。

「命乞いしないの？」

お、しても。

「まあ、しても意味無いけどね。」

やっぱりそのオチにいくのか……。

まあ、定番だからな。

仕方がないか。

「5」

ああ。

「4」

うう。

「3210」

ダダダダダダ！

無数の鉛の塊が俺の軀を突き抜ける。

今まで流れていた生暖かい鮮血が少量宙を舞う。

痛みで意識が薄れる中、背中から落ちていく感覚を覚える。

ガバッ！

吐血、そして着地。

「これで本多家は終わりました……わ！」

ザクツと実沙綺が持っているナイフが腹に突き刺さり、痛覚が軀中を走る。

そしてかき混ぜる。

内臓がぐちゃぐちゃと音をたてる。

痛みがまだ死んでない。

さっさと死ねばこの痛みから脱出出来るのに。

「諦め早いわよ。泰世。」

しばらく聞かなかったけど、確かに聞き覚えのあるこの声。

懐かしいな。

誰だっけ……。

「酷いわね。一緒にお風呂も入った仲なのに。まあ仕方無いか、イギリス行つてたし。」

イギリス、声、一緒にお風呂……あ！

分かった。

姉貴だ。

史上最凶の姉貴だ。

だけどどうしてここに居るんだ？

死ぬ前の夢か？　なら納得出来るが……。

などと俺が呟いていると、実沙綺が腹に突き刺したナイフをかき混ぜる。

激痛が走る。

「あはは！ 夢ならいいねっ！ 残念だけど、史上最凶の姉貴は来てるよ！！」

目を閉じているのでどこに居るかは分からないが、声の感じから、右側に居てそうだ。

「貴女も死にたいの？」

これは眞那の声だ。

「うふっ、貴女こそ死にたいのかな？」

少しおちよくっているようなトーン。

この声の時、確実に人災が起こる。

例えば、死ぬとか。

「あゝあゝ！！」

眞那が人間とは思えない様な悲鳴をだす。

鼻、耳、口から血が噴き出す。

と、同時に実沙綺が大量に吐血する。

2人の悲鳴が響き渡る。

そう、姉貴には超能力的な物が生まれつきあり、姉貴がイギリスに

行くまで、それに苦しめられてきた。

「大丈夫……？ 愛しの弟ちゃん。」

少し声が震えている。

珍しいな、姉貴が泣くなんてさ。

俺の腹に姉貴がそつと顔を添える。

内臓と血が姉貴の綺麗な顔を赤く染める。

すまない……、もう俺死ぬみたいだ。

「いやだよ、私は。死なれたら困るんだから！  
ねえ！ ねえ……  
……ら！」

徐々に薄れて行く姉貴の聞いたこと無い様な声。

そして、ヒヤリと冷たい涙が俺の腹に落ちる。

「泰世あああああ！！！！！！！！」

No. 8 ハゲしい悲劇（後書き）

寒いですね、はい。毎回言ってますよ。まあ夏になると暑いですね  
に変わりますが（笑

No. 9 怖い……ハゲ（前書き）

見た人感想等お願いします

No. 9 怖い……ハゲ

と言う妄想を眞那と実沙綺と一緒にしていた。

何故こんなことになったかと言うと、眞那が突然、  
「泰世を殺したらどうなるんだあろおなあ？」

などと呟いたのがコトの発端だ。

で、何故か俺まで妄想に付き合わされて、まああんな感じになってしまった。

姉は……まあイギリスに行っているのは当たっているのだが……、話した記憶が全く無い。

眞那曰く、

「勘よ、勘。」  
だそうだ。



女の勘って本当に当たるんだな。

さてさて、俺が死ぬと言う嫌な妄想を終えた俺達は、何故か模擬店の外で待っていた円と合流して、昼飯を買い込み、立ち入り禁止の南館5階に続く階段前に来た。

何故立ち入り禁止なのかは知らないんだが、噂によると……ここで自殺した生徒の幽霊が出るらしい。

何人も見たらしいから本当だろう。

教師も誰かは忘れたが、見たらしいしな、信憑性も高い。

で、何故来たかなのだが、……真那が行きたいと駄々をこねたので、仕方なく来たわけ何だが……

寒い！！ 寒すぎる！

まだ昼間だぞ！？

それなのにこの寒さ、まるで冬の暖かい時みたいじゃないか！！

それプラス、いつでも幽霊さん出てくください、と言わんばかりの薄暗さとひんやりさなど雰囲気物が凄く出ているんだが！？

まあ冷静に考えてみる。

幽霊なんて居ないんだ。

「おい、泰世どうしたのお？」

「本多君？」

「どうかしましたか？」

おっと、失礼。

どうやらブーツとしていたみたいだ。

階段の上を見ると3人並んで結構登っていた。

時々パンティがちらほら見えるのだが、言つと殺されるので黙つておこつ。

「だいいいやあああああああああ！！！！！！！！！！」

鬼の表情をした眞那が階段から飛び降り、スカートが風の影響で、フワリと捲れて白色のパンティが丸見えになる。

のも束の間だった。

眞那の上靴の底が目の前まで来て、そのまま顔面に直撃し後頭部から床に激突した。

つてえ！！ いきなり何するんだよ！？

「あんたがぁエロイコト考えるからよ！」

まだ乗り続けている眞那を押し退けて立ち上がり、階段を登り始める。

頭、特に後頭部が恐ろしく痛い。

どうしたものか……。

「アハハ、大丈夫？」

耳元で誰かが囁いた。

ああ何ともない。

ん？ 今の声誰だ？

眞那はあんな声じゃないし、実沙綺も円も上の方だし……。

まさか…？

「アハハ、そのまさかだよ。」

また耳元で誰かが囁く。

いや、誰かじゃない。

確実に幽霊だ！

No. 9 怖い……ハゲ（後書き）

寒すぎですねえ。毎日布団から出るの嫌ですよ。泣きたい。・  
（ノ、）。。。。

## No.10 死にかけハゲ（前書き）

今回は前回の続きなモンです

## No.10 死にかけハゲ

「アハハ、君面白い。」

声は聞こえるのだが、まわりを見ても隣で怒りを静めた眞那が、ワクワクした感じの笑顔で階段を上がっているだけで誰も居ない。

自然と怖さから冷や汗をかいてしまう。

変に冷や汗をかいている俺を不思議に思ったのか、眞那が時折チラチラとこちらを見てくる。

上を見ると5階と4階の間の踊り場で立ち止まって、ピクリともしない2人がいる。

この声と2人を怪しく思いながら、俺は上がっていく。

上がりきった瞬間だ。

軀の自由が聞かなくなり、息もしづらくなり、何よりも、多少は聞こえていた雑音が、一切聞こえなくなった。

さらに目の前の階段は黒くなり、さっきまで足が着いていた階段も黒くなっていた。

これだけの条件がありながら不思議と、恐怖心はあまりなく、逆に悲しみがとても感じられた。

だ、誰なんだ!?

勝手に口走る。

もちろん返事は来るハズが……

「ここで死んじやった哀しき乙女、つてところかな？ アハハ」

あつた。

いや、あつてしまった。

決してあつてはならないハズのコトがあつてしまった。

だが、さっきも言つたように恐怖心はない。

しかし一体この声はどこから聞こえて来るんだ？

どこに居ても聞こえて来るみたいだが……。

「私は壁に制服ごと埋められてるから、何処からでも話しかけられるんだ！ アハハ、便利でしょ？」

な、なんなんだこいつはあああああああ！？

と思わず言ってしまう様な、実に変なテンションの少女だ。

少女……と言つてもいいのだろうか？

「な、何あの娘……！？」



「幽霊…かしら？」

「本多君があのだに連れて行かれるの!？」

あーなんだか嫌な雰囲気になりそうだ。

「アハハ! 君たち面白〜い! だあかあらあ……殺して、あげ・る。」  
うわあああ!

とうとうこの娘壊れちゃった!

そう思った時だ。

壁から赤い煙を出してゆらゆらと揺れて浮かぶ赤い火の塊、俗に言う火の玉が無数に出て来た。

もちろん体が動くハズもなく、俺たちはただ立つことしか出来なかった。

流石にこれには、死を覚悟したね。

俺諦め早いから。

なーんて、俺が思っている内にも火の玉は近付いて来る。

少しずつだけど、息苦しくなってきた。

窒息死と溺死は苦しいらしいなあ……一緒に……。

かなり早いペースで諦めモードを繰り広げる俺を横目に、他の3人は必死に生き延びようと、頑張っている……様な顔をしている。

正直な話、身動きが取れない訳で、何も出来ないから何をしているのが全く分からない。

「アハハ、終わりだよ。君たちの人生は。私の様にね!! アッハハハハハハハ!!」

姿が見えない少女的な幽霊の声鼓膜を突き抜け、脳内で響き渡る。

と同時に痛覚が全身に感じられる。

今までで1番痛いかもしれない。

よくよく見ると俺の体に火の玉がいくつもと言うよりは無数にへばりついていて、ついているトコが痛熱くて、なんというか早く死んだ方がマシかも。

って感じかな。

「本多君…本……多……君……。」

あああ!

とうとう円が力尽きて、床に倒れた。

「泰世の……バ力野郎お! 私をこんなところ……この小説から……存在を消すなんて……バ……力……野……郎……お。」

ふう、やっと疫病神が死んでくれた。

このままのノリで行くと次は実沙綺か？

「その通りですわ……。して……。やられ……。ました……。です……。わ……。」

やっぱりね。

大体そうじゃないかなあっと思ってたよ。

で、最後に俺が1番痛めつけられて死ぬってオチなんだろう？

わかってるよ……それくらい……。な。

って、早いだろ俺死ぬの！ 絶対に早いよな！？

あ………。

「バカ！ ここで泰世あが出てきてえどうすんのよお！？」

「死に価しますわ。」

「折角の1話全部を妄想に使おうとしたのに。本多君ったら！」

はい、そうです。

円が行った通り、全て俺らが模擬店回りしている今した妄想ですり

ああ、俺に明日は無いなあ……はあ。

「ウフフ、今日は淫乱パーティーねえ………!!」

「真那姉、淫乱では御座いませんわ。騷<sup>しっけ</sup>パーティーですわ。」

「それよりも闇鍋パーティーしようよ!?!」

言いたい放題言いまくるDSの女たち。

とりあえずここから逃げ出さないと……。

「泰世あ…逃げたらバニーガールの姿で学校を隅から隅まで歩いて貰うからねえ!!」

はiiiiiiii!!

俺に平和な日は来るのだろうか……。

## No.10 死にかけハゲ（後書き）

寒いですねえ。自分、髪型が坊主だから頭が特に寒いんですよ。  
帽子は似合わないんで、防げるものが何も無いんです！！ この気持ちは判る人にしか判りませんよね？

No. 11 ハゲしい… さん（前書き）

はい眠いです。という訳で文化祭も終盤ですたい！引き続き、駄文にお付き合いしてください？感想及び誤字脱字の指摘待ってまっ

No.11 ハゲしい… さん

妄想で夏の文化祭初日を潰してしまった俺。

2日目であり、最終日でもある今日は、円と朝から2人きりで模擬店を回る約束をした。

そんなこんなで、ハイテンションな俺は柄にもなく下手くそなスキップをして登校している。

基本歌が嫌いだからスキップもあまりしたことが無かったからな。

下手くそで当然だよな？

などと、自問自答を繰り返しているうちに、校舎は見えてきた。

約束の場所は校門前ってコトになっている。

……ワクワクが収まらねえ！

でまあ、校門に5分遅れて着いたのだが……円が居ない。

一体何処に？

しっかり者だから遅刻は無いと思うんだけど……。

「円搜してるでしょ？」



ん、まあそんなとこ。

何処からか現れた真那にかなり適当に返事をする。

厄介なコトにならないように心の中で祈りつつ。

「円ならあ、さっき柄の悪い奴らに森に連れて行かれてたよお。」

な、なんだってえ！？

それを早く言え！！

すぐさま俺は学校の敷地内にある森に向かった。

結構広いから深いところに行かれたら、見付けることが困難になる。

まずは森の周りを走って見回る。

しかし誰も居ない。

焦りが積もっていく。

行くしかないか。

俺は奥に入ろうとしたその時、

「だからあいつは殺れつつてんだろっが！！ お前らぶっ殺すぞ！  
あん！？」

という非常に聞きなれた声が奥から聞こえてきた。

あまり想像したくないあの娘の声が。

「し、しかしお嬢様SPがいて……」

「そいづらも殺ればいいだろうが！ バカか、お前らは！？」

「は、はい、はい、はい！　！！！」

あ、やべ、叱られてかなり凹んだ奴らがこちらに来る！

黒服＆黒サングラスだから多分ヤクザだと思われる奴らの声がどんどん近付いてくる。

見付かったら確実に殺られるな。

咄嗟に茂みに突っ込んで隠れてヤクザが通り過ぎるのを待った。

ブーン

チク！

[illegible]

突如何者かの攻撃に俺は、驚いて叫び、茂みから飛び出ってしまった。

命運尽きたり……。

「……貴様！ 不意打ちとは…さては山波組の奴か！？ そうなら、死ねえ！」

銃を取り出した。

多分回転式だから即死だろうな。

頭に当たればだけどね。

ダン！

死ぬと覚悟して諦めた時、茂みから何やら変なデカブツが出てきて、回転式の弾に当たった。

多分3メートルはあるであろう。

よくよく見ると蜂の形をしていて、羽音もブーンと鳴っている。

弾が当たったところから、緑色の血らしき液体が飛び散った。

ブーン……

「ぎゃあああああああ！ー！」

ヤクザらしき奴らが悲鳴をあげながら逃げ去る。

それを見た（？）のか、デカブツは茂みの中に入っていた。

……小説の方向がそれた様な気がした人、その通りだぞ。

この小説の主人公がこんなコトを言うのも変だが、本音を言つと、作者の気紛れで書いてるから方向がそれてしまうのだ。

作者に代わって言おう。

大変申し訳ありません。

「本多君なにぶつぶつ言ってるの？　かなり怪しいよ？」

いつの間にか円が来ていた。

……かなり恥ずい……。

あはは、何でも無いかな……あはははは。

はあ。

「回りましようか？」

少し斜め前に進んだ円が俺に向かって笑顔で言っていた。

うん、文句無しの可愛さだよコノヤロー！

朝っぱらにもかかわらず人気の模擬店は満員御礼。

もちろん我らが執事喫茶も満員御礼。

裕大と志流真と伊志田が奮闘してくれている。

頼むぜみんな！！

俺のデートの為に！

絶対に俺を呼び出させるなよな！

と俺は祈るのであった。

午後

俺たちは大変盛り上がっている。

と言つのも裕大&志流真&伊志田、そしてクラスの代表的な女子の眞那&実沙綺&河中島千沙らと合流したから何だが…

買うもの全て俺が代金を払うという不公平というか、なんというか……。

1回で買う量も多いからかなり財布が軽くなってしまった。

かなりの店を食い尽くした後、俺たちは緊急会議を開いた。

その内容というと……

「伊志田って、ほとんど登場して無いよね？」

「む？ それを言われると困る。大体、伊志田光成って言うのもなあ。作者が豊臣秀吉が大好きだからその重臣の名前を俺につけたからそうなったんだ。」

本当なら尾座式清歩おしきせいほのはずだったんだ！

それをあの作者があー！」

……今のままでいいと思うぞ伊志田よ。

どうやらこの意見にはみんな賛成らしく、うなずいている。

「そうなのか……。」

少し落ち込んだ表情を見せる伊志田。

伊志田よ……そこまで気に入っていたのか……？

その、尾座式清歩って名前を。

俺の意見にはみんな賛成らしく、うなずいている。

「まあそんなコトより今日の後夜祭だっけか……みんな行くのか？」

まだ少し落ち込んだ表情を見せる伊志田は今日あるらしい後夜祭と

やらの話に切り替えた。

つつか俺、今初めて後夜祭なんてもんあるって聞いたぞ。

「えっ？」

かーんなりわかりやすーい反応してくれた奴がひとーり。

「い、言ってなかったっけえ？ ま、まあ結果的に分かったんだからあ、い、いいんじゃない？」

強張った笑顔で言いやがる真那。

なんとなくム力ついたので隣にいる志流真の鳩尾を殴った。

くわえていたフランクフルトを吐き出して、咳き込んだ。

下品だがそれなりに面白かったのか、みんなが笑ったので、俺も笑ってみた。

「な、な、何で殴るんだよ！？」

吐き出したフランクフルトを取って袋に入れて、言ってきた。

もちろん殴りやすいからに決まってるだろう？

「だろうね。」

とりあえずここで志流真との会話は終わった。

後夜祭までな。

ん〜と言つよりはみんなが後夜祭の為に仮眠取りに帰ったから俺も帰った訳なんだけどね。

という訳だから寝るわ。



No. 11 ハゲしい… さん（後書き）

寒いですね。そうそう、こないだ机を掃除していたらなんと！

自分が最初に書いた恋愛小説が見つかったんですよ！

そんな訳だからそれを書いてみます。原文のままです。

No.12 漫才みたくハゲ（前書き）

苦手な恋愛にさらに苦手なコメディを入れてみました。

## No.12 漫才みたくハゲ

R R R R R ! !

R R R R R R R R R R R R R ! !

R R R R R R R R R R R R R R R R R ! !

ガシャン！

うるさくなる目覚まし時計を頭突きで黙らせる。

少しだけだが額から血が流れる。

それを手で拭って今黙らせた目覚まし時計を視界が儘ならないまま、見る。

2本の針は午後8時30分示している。

ああ眠てえ。

まだ寝たい気持ちがあるが、生憎だが寝過ごしているから時間がない。

フツ、非情に残念だ。

何か俺、キャラが変わってないか？

まあそんなコトは気にせず、身仕度を済ませて、裕大の家へ向かう。

いや、アイツのコトだから先に行ってるな。

なら、志流真の所に行く方が妥当かな。

志流真の家に着くと、ベランダをよじ登り、志流真の部屋の窓のガラスの鍵的な所にジッ     ライターの火を当てる。

それからバタフライナイフを取り出して、ジッ     ライターで温めたガラスの所をくり貫いて鍵を開ける。

そして静かに窓を開いて、静かに邪魔しま

「土足で勝手に入ってくんじゃねえ泰世あ！！」

俺が土足で入った瞬間、真横から飛び膝蹴りが俺の側頭部に直撃する。

と思うだろ！？

しかーし！

俺の頭はスキンヘッド、そしてかなり頭の形が丸くて、頭のお肌がツルツルだから、直撃せずにそのまま受け流せるのだ！！

お陰様で志流真はそのままの勢いで壁にぶつかって、ノックアウトオオ！

という訳で土足のまま部屋に上がって、志流真を起こして、部屋を出る。

遅いけど俺の頭便利だろう？

「いや、不便だ！」

隣でぼざいている奴はほつといて、階段を2歩で降りる。

このスリルがたまらないんだよ！

俺たちは杉里邸に向かった。

## 杉里邸

ある程度奥に（学校から離れる）行くと、この辺りでは豪邸に部類

されるであろう杉里邸の塀が見える。

つーかこの塀、塀じゃなく石垣だな。

俺の身長の5倍はある。

門もでけえ！

たのおもおおお！

シーン……。

「何い奴だああ！？」

しばらくして、ある程度声のトーンを下げたであろう女声が聞こえてきた。

泰世だよおおお！

「そこは普通かよ！？」

フツ、これだから素人は困るよ。

「いやいやおかしいだろ！？」

「泰世あ？ 今行くう。」

「眞那姉、上着を着てください。それでは只の露出狂です。」

外で寂しく漫才をしているのになんか中は楽しそうだな。

「おつまつたああ！」

でかい門から、学校生活では見れない様な  
厚化粧をした眞那と実沙綺が、現れた！

戦う バック？

ボール？ 逃げる

ピッ！

太陽拳？ 頭突き

フラッシュ ????

ピッ！

泰世の頭突き！

「わ！ 危ないでしょ！」

攻撃は外れた。

戦う バック？

ボール？ 逃げる

ピッ！

だいじなものか？

じてんしゃ的なの  
かなりすげえ釣竿  
蠢くなにか…。

ピッ……………。

ブイイイイイイン！



「いやややや！ 変態iiiiiii！」

「何やってんだ！ るあああああ！……！！……！！」

志流真の飛び膝蹴り！

ぐはあ！

急所に当たったああ！

泰世は倒れた。

目の前が真っ暗になった……

「おい！ 女の子の髪の毛をなんだと思ってんだ、てめえは！？」

俺の右手を掴んで、珍しく声を荒げる志流真を横目でチラリと見る。

どうやら怒っているみたいだな。

「その前にその歪なバリカンは何なんだよ!? ガッガッと言ってぞ?」

ああこれか?

これは桃内士郎氏の小説の番外編であの殺人理容師が使っていたバリカンだが、何か問題でも?

「すつごおおーいいいい、これがあのおバリカンなんだあ。」

静かに近付いてきた真那が蠢くバリカンを触る。

「大有りじゃ、ボケがああああ!! そして真那! お前も何触つてんだ!」

やたらとうるさくツッコミをいれる志流真を非難した様な目で見つめる。

もちろん真那もだ。

ジイイイイイイ。

「な、な何見てんだよ!! て、照れるだろ...。」

自ら頭を撫でる志流真。

……そっち系かよ…。

とまあ、志流真はほつといてだ、眞那、何時から開始なんだ？

「んーとお、8時。」

は？

もうとつくの昔に8時過ぎてるんだけど？

「眞那姉、もうすぐ8時45分です。」

「ふうん………つて大遅刻じゃないい！！  
実沙綺、馬を3頭、引  
つ張って来て！ 今すぐ！」

う、馬？

「もう用意できてます。」

ええ！？

俺たちの横にはサラブレッドが3頭、鞍をつけて、今すぐどうぞ、  
と言っているかの様にいる。

眞那と実沙綺は軽く飛び乗ると鞭を打って、颯爽と駆けていった。

それに続いて、俺も飛び乗る。

後ろに志流真を乗せて…志流真の足に鞭を打つ。

「いつてええ！ 何しやがるんだ！？」

置いてくぞ？

「右よーし、左よーし、行つてよーし。」

駅員さんの真似をして軽く誤魔化す志流真。

くくく、つくづく面白い奴だ、志流真っていう人間はな。

途中志流真の足を叩いているうちに、学校に着いた……………。

No.12 漫才みたくハゲ（後書き）

寒いですねえ。浦和レッズACミランに負けましたねえ。だけどスター軍団に善戦でしたねえ。あと少し……だったのに…

No. 13 祭で悲しむハゲ（前書き）

短く！

## No.13 祭で悲しむハゲ

後夜祭は屋上で開かれていた。

俺たちが着いた時には既に他のメンバーは揃っていて、結構盛り上がっていて、テーブルの上には各模擬店の品物が並んでいる。

かなり豪華…とはいかないが、普通の家庭の生徒から見ると豪華だろう。

にしてもだ、少し酒臭い奴がちらほらいるが、まさか…。

「泰世ああ遅いぞおお。ヒック！」

古典的なしゃっくりをして裕大が近付いてきた。

こいつかなり酒臭い。

結構飲んでやがる。

未成年のクセに酒なんか呑みやがって、先生に見つかれば確実に退学だぞ？

心配を知らない裕大は缶ビール1本一気に飲みする。

急性アルコール中毒なっても知らねえからな。

ぐうううう。

ま、まあ腹ごしらえでもしようかな、おっ、あの焼きそば美味そう！

「本多君、ちよつといいかな？」

焼きそばを紙皿によそっていると、テーブルの向こう側から円が話しかけてきたが、何だか円は深刻な顔をしている。  
ん？どうした？

「私ね…イギリス行くことになったの……」

……そっか……。

いきなりすぎて返す言葉が見つからなかった。

俺は焼きそばを諦めて走り出した。

大きすぎるショックだった。



「なあにやってんだ？泰世らしくないぞ？」

志流真……

「ほら！泰世の好きなインスタントラーメン、しかも野菜をいっぱい入れといたから食え。」

優しすぎる志流真の手からラーメンを受け取り、割り箸を綺麗に割って麺を胃の中に流し込む。

この人参つめえ……わ。

この大根も、この白菜も、このキャベツも、この水菜も、このピーマンも、この蓮根も、この里芋も、長芋も、そして……この強烈な臭いを放つドリアンも

って、何入れてんだよ！

ドリアンは無いだろ！

マジであり得ないって！

「元気出ただろ？」

た、確かにそうだけど……さ、マジでドリアンはないわ……。

そう思わないか？

「すまん、俺ん家一家全員ドリアン好きだからわからんわ。」

あつそ……

「まあ帰るぞ、みんな待ってるからよ。」

ああ……

志流真……かつこよすぎだよ……。

No.13 祭で悲しむハゲ（後書き）

遅くなりましたが、明けましておめでとう御座います！！ 今年も  
宜しくお願い致します！！

No.14、後夜祭 後編 ケ、（前書き）

甘口、辛口感想どんな感想でも待ってます！

## No.14 、後夜祭 後編 ケ、

ここで、キャラ紹介なのだ！

やっぱりまずは主役から！

本多泰世（15）

身長：165cm（リアルな作者の身長w）

体重：54kg（これまたリアルな体重w）

趣味：食事・睡眠・読書（またまたリアルな趣味w）

特技：速読<sup>リアル</sup>

性格：意外と鈍感で、もの事に気付くのに遅い。ちなみに我が儘だったりマイペースだったり人に併せたりする。気分屋？

備考：本多財閥跡取り、以上！（オイ

という訳で（No.13の続き）戻って来たのだが……かなりの力ツプルが出来ていて、所構わずイチャついている。

志流真：どういう事だ？

「知らないって！俺も泰世追いかけた時はこんな雰囲気じゃ無かったし！」

すんげえ慌てようだ。

この様子だと嘘はついてなさそうだな……多分。

にしても腹減ったなあ……何か残ってないかなあ……サラダ……サラダ………

な…………い…………

ちよ、もう一度探してみよう…………サラダ…………サラダ…………サラダ…………  
…………サラダ…………サラダ…………

やっぱり無い…………噓だ。

俺が飛び出した時には山みたいにあつたのに！！

悪夢だあ…………サラダ、円、ドリアン…………全て悪夢だあ…………！！

俺は頭を抱えて、沈んでみた。

「あゝごめんごめん。ほら、サラダの代わりにステーキで…………」

「肉なんかいるかあ！？」

軽く志流真の言葉を遮り、持ってきたステーキを上段蹴りで蹴飛ばす。

ステーキは綺麗に弧を描いて、志流真の頭上を越え、酔っ払った河中島千沙のカップルの間に落ちた。

もーまんたい、もーまんたい。

さて、俺は不幸が起き続けるので、何だか面倒臭くなり、テーブルの下に潜り込んだ。

暗くて落ち着く…………まあ、外も暗いけどさ。

「じ……………っ」

何やら背後から非情に痛いと言つか、怖いと言つか、何と言つか殺気？

「じいーーーーーっ」

うん、やっぱり痛いほど感じるね。

しかも声も出してるし、間違いなく誰か怨念の塊的な奴いる。

どうするか……恐怖心がすんげえ湧いてくるし…

誰か確認するか……？

『じいーーーーーっ』

声がデカクなたし、確認だけでもすつか…

恐る恐る確認する。

そこにいたのは……

誰……？

「深山梨華…同じクラス…知ら……ない……？」

深山、梨華っすか？

大変申し訳ありませんが、存じ上げません。

頭をさげる。

「そう……」

そういつて、持っている本に目線を落とす。

不思議系天然キャラ発けエエエん!!?

「私は…天然じゃない。」

らしい、が、しかし、一般的にこんな暗い所で本を読んでいる奴は十分に不思議だぞ!?

「気に…しない…」

そうか…

…

…

…

…

…

…

…



.....

長い長い沈黙。

一番このタイプの沈黙が嫌いだ。

こいつは苦手なタイプの女子だな。

どーするか。

何か話するか？

何ていう名前の本を読んでいるんだ？

随分分厚いが……

「近親相姦『守の場合』」

言葉を失う俺。

つまり十八禁って訳ね？

不思議系天然系ヲタクキャラか……ヤバイな、志流真を越えるヲタクキャラの登場だな。

後々厄介なことになりそうな雰囲気醸し出してるし、ってかそんな雰囲気以外感じられないね。

どいつもこいつもキャラ濃いわ。

今後俺のツツコミ兼ボケ兼ナレーションがツツコミ兼ナレーションになりそうな気がして、仕方が無いのだが……

ふと梨華の近くにある皿に目がいく。

サラダ……サラダだ、サラダの生き残りだ！

サツとサラダに手をだした。

あれっ？無くなった？

「私の。」

くれよ！少しぐらい野菜が好きなんだよ

「私も……」

サラダが盛られてある皿を、三角座りしたあの三角の部分に確保して、時折サラダを食べる以外ビクともしない。

あとページを捲るとき。

さて……突如強敵が現れたな。

どうやるか……

とりあえずサラダは確保したいけど、梨華という強敵が鉄壁（？）

の守陣を引いてるし……

どうしたモノか……

ん……？

背後からなら深山も油断してるんじゃない？

サッと、下から抜け出して深山の背後の位置に立ち、呼吸を整える。

今宵の最終決戦が今から始まるのか……

頬をパンパンッと叩いて準備万端。

一気にテーブルの下に潜りこむ。

サラダ……あら？

サラダは？

「…………貴方、バカね？」

背後から深山の声がしたので振り向く。

サラダと本を持って、俺の真後ろで優雅にスカートを揺れながらこちらを見ている。

その目には若干俺を非難するような目をしている。

ようするに、俺はまんまと罠にかかった訳ね……？

.....目眩が.....

ここは.....？

見慣れた部屋だな。

あ、俺の部屋か。

夢.....だったのか.....？

No.14 、後夜祭 後編 ケ、（後書き）

寒いすねーそう言えば先日大阪でも雪が積ったですよ！！寒かったんですけどね……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9839c/>

---

ツルッぱげ！

2010年10月15日22時32分発行